萬葉集遠江歌考　全

へ 4
4368

遠江歌考序

天皇ハ阿米乃志多しろしめ斯らし臣者
詔表奏聞之國を治め東乃久迩人
都乃登理て阿ひなれ安く鏡紫宸
いたる志於歌人隆津事笛時遠江海於
佐き毛理乃詠あるとも萬葉の真間蘆部
千代の昔を思ひ出て鮮置経し古み之志

八十路翁乃白髪乃夏目甕麻呂
まかり彫て後の世に傳聞年於次
加紀保藝王曰
岡部のや縣居翁縣居在けり
翁人歌乎書記し書き殘のこし
萬葉乃語乃阿許曾乃許那杼
之須業述乎述て阿乃書八十路

經て絶えし歩み遂げ業述乎
傳守し世乃白髪乃甕麻呂伊
伊曾志て石末述彫らせ
書紙保路年於乃變言乃
神も氣萬斯比登加乞
見年

文政二年秋日

内山真多都
八十齢にて記

萬葉集遠江歌考

巻第一

二年壬寅太上天皇幸[イデマス]于参河国[ニ]時[ノ]歌

引馬野[ヒクマノ]尓[ニ]仁保布[ニホフ]榛原[ハギハラ]入乱[イリミダリ]衣[コロモ]尓[ニ]保[ホ]波[ハ]勢[セ]多[タ]
鼻[ジ]能[ノ]知[シル]師[シ]尓[ニ]

真淵按るに二年壬寅ハ文武天皇即位二年之
太上天皇ハ持統天皇此時太上天皇と申せし時之
此御幸ハ続日本紀巻第一冬十月よりみえたり
それより参河国に御幸ましましゝ遠江にも至り

故 先光清風氏 大正十三年十月三十日 先光華氏寄贈

なよしともみやこねとは讀書の名をむさしのゝまく
よしはなの紀にみえし　東鑑にも建長
四年宗尊親王のくだりましし時引馬の名にやどり
まふよしみえしかれはおのづからいにしへよりの地名
うるはしき物にして今も名高き引馬野とて
いふをのかれはいと大なる野の内にては三方が原
といふも此野の外にはやうやく河にまでつゞきぬれは
此原は殊に古人乃猿の遠まてに見ゆれはかく
よみける事も此集は東國の名にいひなして標て
猿の地名乃声あるは詩歌にむかへて知るし

○まつかぜの枕辺にはあかる物は紅艶のあれと
此り蒼の千に
こゝろしるこゝろもいますゝしかるなくし
此野乃萩にまかひてさやんとちるすゐ（居之）
に映しらしる萬集に朝日新まかへるやまと
すみれるは餘光のかのしく東の山のうへに映し
こゝろをいふに趣て香小もまつらふにはそこし
なくあはやうにしてこゝろにしふ聲のうわひ
に僻音はおもくいへは通りて知るし中にも
古は多くに後くはしつ絶え○にかなはは萬集には

芽子と書てはぎとよみ又は榛の字をはぎとよむより
きたれる榛は借字なりはりのきといふ木のことにて
いひし実を次に染具としてもちゐる木なりしを萩
と言ひならはしくは秋はぎにかりてかける也
けるも借字也 あるへ問榛も借字にて衣をすりてそめられは〔？〕
〔？〕榛の〔？〕
〔？〕芽子の〔？〕榛の〔？〕
〔？〕芽十〔？〕の〔？〕は秋〔？〕花〔？〕
〔？〕の〔？〕榛〔？〕
〔？〕
〔？〕
榛字は〔？〕假借〔？〕 ○又〔？〕花の〔？〕
よく〔？〕 ○夜〔？〕花の〔？〕
映しみ〔？〕 ○旅の

あるじなは京まで〔？〕旅にて卿のま
〔？〕入られは〔？〕花の〔？〕
〔？〕 又此御哥は十月なれは
萩は散〔？〕
〔？〕花の〔？〕

巻第八

遠江守櫻井王奉天皇歌一首 天皇ハ聖武也

九月之其始鴈乃使尓毛念心者可聞来奴鴨

桜井王は続日本紀にかくしるされたり又
但いまだ考ぬ文旧紀の天平十六年の所に
大蔵大輔従四位下大原真人[マウト]桜井卒とかゝれは
此は真人の姓[カバネ]を賜りし臣とせしなるべし
さらば此集巻九に大原桜井真人とあるも
同じ王なるべし

○七月乃は拾遺集に伊勢の許つかはしける
よみ人しられ数はみそらにあまのめをすむ七月
とひやらしめぬらつまこふる
秋ならで逢ことかたき人の(?)ありとしね我をも月と

いつまでやあはんと侍れは秋風は寒くなりゆく
中に此月をわたりはてるべし○その神人の
使なり 一本便なりとあり 義はかはるまじし 禮記月令曰仲秋之月
鴻雁来 季秋之月鴻雁来賓これは八月にまづ
来るを主とし九月におくれて来るを賓と
すといへり しかれは大抵をいふときは
あきには九月まではかりにまいりてき
いふべしのちはさるまじに雁や使とは
蘇武の古事によりて○恋てのとは天皇
のみかどにおもひしまつらせまつるものねは

おほくかすまれはおもしき所の鳴なれはしかれ

しみなきれしのふとく

天皇賜報和御歌一首　報和とこたへ のたまふ此集に

和歌とかゝるは皆返歌なり　和歌しるそ
やまとうたしんみうたは古今集時分よりの述

大乃浦之其長濱尓縁流浪寛公乎念比日

大の浦も濱は遠江にあるよし此御製によりて志る
れたり天龍川の東は大の浦よりふかね御製
まかありの海なるへし。ゆきは寛の字
のとりてをしろさいゆゑらは前は大ふかきの
ゆたのゆたなるたいたふかき寛の字を出

まゝ今まおるゝ大海の波はたかねの海の面
まかくてはらかし御製のごとくいま濱の底の
ゆたくとさゆるふかめなるをおもいめ時ん
は此志きりはゆたしらしさておいし海すく
こまも濱とい君のおいし御す心を述さまれ
君の御代ゆゑ御事とあるは天皇の御事より
また人とけふ氣まて、またはおもほかしん
此集には其ことさはまさしく歌よ侍り

巻十四

遠江國相聞歌二首

此集に相聞歌とあるハ古今集以下に恋歌と
いふ事に似たりされど此集にハ男女の恋情のことのみにあらず
親子兄弟妻子をおもふ心をもかねたる也是此
いふは入りたり互にあひおもふ心をかよはすゆゑと
いふ義也此二首ハ恋の相聞也

阿良多麻能伎倍乃波也之尓奈乎多弖天由
吉可都麻思自母寐乎佐伎太多尼

あらたまのきへの里乃女が男に贈る歌也　○あらたまハ
これハ郡の名也和名集に遠江國麁玉郡
郡あり今ハ小郡となりて文徳実録に
麁玉川ハ三百丈つゝみをさけりしよしみえて
今もありむかしハそのあたりなりけれハしるへし
○きべの林ハきべの人乃林也此ハ今ハ
さだかならず或人のいへるハあらましのちかく
に貴平村ありこれなるべしといふ
國郡に村の名を佳字にあらためしかハ
これハ貴平と改て伎平ハへつる
なるにあれハつゐんを伎平の音へい

かうによりてかのつゝきくいふよしびかし
侍るなるべし。なすをさてしは海をたゝせて之
人をさしてなれしとまうしゝかは古語。
ゆきふりつもりしは雪欲積りし也。いとをかし
よしねは霰をえしらでなとはめるをしを
いふ。然のうへは此ぬる女のもとは男のつむ
来りて此林に立てさぬねせんからを待に
寒夜の水は雪となりつゝもこらひしなくなるに
つらしはすぶめぐきよしかけるゝれは然云て
寝床に入てねようしゝいふ。

伎倍比等乃萬太良夫須麻尓和多佐波太伊
利奈麻之母乃伊毛我乎杼許尓

まくら人は此女そのゆゑにあれはさしていふ之歌
なるいましいへしは音ねていふにふかくしれ。
またふかす海は斑衾之。着のもすまふすま衣こまふすまより まふすまは深からぬを織
さらぬをいふなりし衾は今昔物語に要服のまとく
作てねるものにつきのあつさを寿そふりなしを
めつらしとかくる異人の侍りけれはいふなる
なるを侍るへし。なさゝさかるさは綿なり
さかさは多綿の中黒之多きつるをさいし

いふハ古語なり○いりまし〱をれハ入まちましを
○妹がもとにハ妹ハ小床之妻をいへりといふハ
むかしの語語之いまだ妻と定めぬを名づけ
せるをハやうそいましといふハ古一のことば小どこハ
疑姪のさの語のしくちいさくせまきゆゑに
いへバ女をしのびかくれしまさしにハあらず
さしむつまこころかよはしたこしのりやつまをまつ
らんとおのくしのあしといふさしむしろを同し
くて只さびしさ我ありなん○妻のなかなえの
あるハをさそもしそといふハまちかへりいはず語ば

入りますいしまきの従之入まるれハ気ニるるを
きたるをいふハましく物をも物うらん又上るか
入といひたん事までまてかくしまのぞ歌
ゑもくよいはず詠よ入りなんものとし詠
まめる時よ立待しけりのことしさを物を
いふれさらハ昔るハ恵じてのきく人をいふなり

同巻
譬喩歌

よしなか物をおしてきれ紐よあらし物し

かくもいふとあり又言ふらくは
湖をみむとてはりわたしてかく
しるしたれどもひのことまで言ひ伝ふる
かくありが一向にあらずていふ他物もなく
てこれは別にしるすべし
等保都安布美伊奈佐保曽江乃水乎都
久志安礼乎多能米弖安佐麻之物能乎
さほつあふみは敷智郡と濵名郡のあはひに
大なる湖ありし也今は、新居の（今新居といふは此也本地名なるは新居也）
松原より堀られてより湖水となりつる如

より京ちかくに淡海あるにむかへて遠江とは
遠津淡海といふ言にて浜名のはまは駿河とあふみとか
おほうみのはうをつゞればふの一浦ともいへり
あふみとはいへる湖は淡海に對して水はあつければ
淡海といふ也○いなさ細江は和名集に東遠江
引佐郡にありて今もこの山をいなさ山といひ
村をもいなさといへる山あひをあさくいり
まがりたる入江を細江といふにこそといへれ
されどこれの所は後の人は大道なりとては
すこし人をすむ人をいはかはじとなむきり浜云

蓮池のおもむき蓮ある池をいふにて後
世俳諧に随ひしものもありしとぞ古風也
のやうつきは今は二字をまなしては俳らぬなく
元昔は四国のことは此市の里人は関府に居る郡国に
東よりわかれて諸国へ来りし木に昔よりある古
姓のあることし（古白氏といふは士のつかひ也）此方は四国風なれはいふさ野の
野口なるはしみてあるへし。このつらしは續日
本紀に難波に標標をたてしとありしが故
なくて此様なるしかれど仮名なるは尺すを
きざみ付て水中に建おきて水の深浅を

しるしなりに水脈簾（ミヲツクシ）の歌也。あはれなるものとては
我を粉粧（シメ）の古はわれをあはれとおもひけん
よのあてはくるにありしものまましなるへし。あきまし
物をは清き物ときよしは口に清し。くれは付
入江のこふつらしのとしふる川のつのつもを
いひつきはさらりしるあひしそれまもしるに
まなるりくこれは我まいいし深しししく
のゝあるものとしそのなげきを標標にもしく
てのぶる也。

巻十一

正述心緒（タヾニオモヒヲノブ）

璞之（アラタマノ）寸戸（キベ）我（ガ）竹垣（タカガキ）編目（アミメ）従（ユ）毛（モ）妹（イモ）志（シ）所見（ミエナ）者（バ）

吾（ワレ）恋（コヒ）目（メ）八（ヤ）方（モ）

寸戸の二字を仙覚が本にすとゝ訓し
たるハ本書をまされの為しつくまゝ訓
せしや璞之とかきてハあらたまのとよむへくハ
よミてあれとも其を寸戸の冠辞とあるし
例なるをれハあらたむへしきへと訓
ては信人のしあるふみの名ときくしすと

きといふハ和名抄なれど遠江ハ馬郡に七寸（キ）
ハすなどいふその郷ありてけりがハのな酒
ていくり寸戸代君の代よりふ郡多き
○是れハ所てふ竹垣のめぐりあけ
妹ともみることあるハうちえとやまとくハ
いとかるつとしてこそ紀中よこそ絵とめ。
従（ユ）毛（モ）といふハよりといふを古語なるゆゑらは
事なり万葉の歌ハ助語人

巻二十

天平勝寶七年乙未二月相替遣筑紫諸國防人等歌

今按ずるに

むかしハ筑紫ハ太宰府をおかれて異國のそ
なへしめられしを出雲を大宰ノ帥しのひて
國人をめしつどへ、ちかよ兵士として遠江
まもらしむ。そのかミ百姓の一戸に男子三人あらバ
一人つかはして郡司に軍團して軍を習練せる
ならひありとしかして軍をつかハしめたる軍あれ
ハ自海さしつかはし大の大宰府へ三年まもりけり

つかハしてまもらしむるをいふ。もしつとめてかはるを番
防人とふいふ。それに中ニて三百人ハ京へつかハして
宮を衛士と云。京にてハ一年あけて衛士と防人
と名付られ、かはりてかへる人ハ國々えぞの防人
旅立し時父母妻子等にわかれしとき作れるも
大宰府にてもおもひ出しうたひしうたどもを
此集のすゑに載けり

可之古伎夜美許等加我布理阿須由利也加曳我伊
牟多祢手伊牟奈之尓志弖

右一首國造丁長下郡物部秋持

かしこやハ恐惶畏なとの字をかくなりかしこし
ともに天子をおそれてこそやみ字ハよみ字に用ひて
しらしめしたる勅辞之○みことのりハ
勅命を蒙りし之○あすゆりや明日よりと訓之
○かいえがいむすねハかえがハ来得とくハ
地の名なりつしがハのみ通してかえのくいむ
らねハ夜共寝之となりしといわるしと
いとだらまりみ共の字を嘗集にむさしよみ
むさいハさましらふみ古語まてかえよみ不のをま
ねをえ○いむなしふしてハ姉無に而之△鬼の

忌ハらしこ詔勅命をかしこりまれハかえの里に
きねせしつゆしてよりて始るの夜よりた
三年々百えむしりねをまへきなるんとりお枕
を排しらるゝ之
○國造ハくにのみやつこにあたりて今の仰の士のさどひ
まてまるハたる郡司なるへし　郡司ハ京より国々にみ多くハ其郡に在りし家のもの之
帰口(ヨロ)ハ仕丁(シテウ)とてつかへ人之ことに奴まじおくしき
百姓之よりえらみしむるハ使なるとまとせおりし
よりさ見よあるふ不のあしのるをえりて呼之

和我都麻波伊多久古比良之乃牟美豆爾
加其佐倍美曳弖余尓和須良禮受
右一首主張丁麁玉郡若倭部身麻呂

いたくこひらしハ痛く恋らし。かごさへみえてハ影さへ見えて也。○よにはわすられずハ世にはわすられぬといふ意なり。じしを申すにはわすれられぬとしも云あてよしといふ詞ハいつものならひなるを。その意はえよらず。詞ハあまりまた。△妻ハ古歌によめれば今は我が飲水に影のうつくきにあまりなれば我が恋るらんよりけふよりも面影のたつらんとしねハ郷にて妻が我を恋たまひ面影にみてわすれかたきを思ひかれハ古も今もかはれることなし。水ハ人の影のうつるものなれはいつもわすれハあきらかの水にもしるしとなむ

○主張ハ軍団の頭書之丁ハまつりごと人のときまつる奴なれはあるは下役つかさ人のごとし

等伎騰吉乃波奈波佐家登母奈尓須
禮曽波々登布波奈乃佐吉低己受祁牟
右一首防人山名郡丈部真麻呂

なにすれぞハ何ぞといふことにて同じ。○
こぞけんハ来ざりけんといふをつめたる詞也
○はしきやし羽は母と云花ハ花ハ母子
草といふ花又母を称して花といひたれ
まぎらはしきをいふと云説ハ云たらんを
畧してとふといふ也後世まゐすてふ
ゐしのてふもけりとし一ケ葉ハといの二詞を
つヾれバちの一詞となれるなりあふさあり
又といのいを畧して太の如く母といふ事也
それをは世ハ又ちちとしてあ通してもとも云之

△まだ花ちらひまでは咲ての花ハ咲きりてあれ
と同じ花とはいへるにて母といふ花の咲きぬ
かなしびしきとし也
○防人ハ太宰府まで異国のあたをまもるやぎまもる
おまる防人と言上けまするは海の濤をいとふ
ことをさせ花もちいてこしもりましけるが
あさ花といふ事を後世六百年程以来の
言のみハ古書をよく見るにまひきたりハ
諸人たちとしてにける防人の言ハ国の
方言のまじれハ古の詞学する人てハ通じにくき

こしりもし

等倍多保美志留波乃伊宗等尓閉乃宇良
等安比弖之阿良婆巳等母加由波牟

右一首同郡丈部川相

とへたやそハ遠江浅海とよみつゝあるを男
諸せバとほつあふみとよむべきを和名集
にとほたあふみとあるハあの字略りて男信
の例ほとくつりけるハもおほて略ふ所を
こまかなきられバえしらぬことなるべし
ゆるのをおもひとゆよりは言ふなるへし

○志るハのいそハ今志良といふ所の近くにある
のなれといふ也○にへの浦ハ濱名郡にあるへし
此名にてけしハ膳具の汁なむと云贄物の
類なるへし積もりなりしをあつかるまゝを
志るハとまへしは若にも似たる数千里をへだて
しれハえひるゝしくて思ふしは離れす
旅にありかいてくるゝさへ行ふ古ゆく三ヶ会
向あとらずなつけしも侍るへ詩経といふ
ふとま挽き添ひせしも実のまゝにいひて花
やかなりとはいへるゝ上古のこゝろはあるしある

しもにしくちもりしなく

知々波々母波奈尓母我毛夜久佐麻久良
多妣波由久等母佐々己弖由加牟

右一首佐野郡丈部黒當

さゝごてハ捧てゝ又母ハ花にしたまはりし
さらバおりてゆきよさしあげて見るべく思ひましかば
さゝげてゆかんをしとおもふなりけり
○佐野郡ハ今さの郡といふてよきところなり
續日本紀に佐益郡の八郷を割て始て山名

郡をおくとありて延喜式にハ佐夜郡とあり
古今集によめるハさやにも見しかけけれなく
よこほりふせるさやの中山といふ歌あり古今六帖
に東路のさやの中山さやかにも見えぬ新古
今集にのせる大峰のさやのさとにさやけき○
なりけりさやにしあり一さて又越後に
よりあるにまいてさやの中山といふ
をもゆるしあるハ古実をこの時代の
ことたゞしこそ残りけるの古実ハ皆
うしなひけるべきなり

父母我等能ゝ志利弊乃母ゝ余具佐母ゝ與
伊豆麻勢和我伎多流麻弖

右一首同郡生玉部足國

とのゝしりべハ殿の後庭をさしていふ
○もゝよくさハ未詳 されど百世といふ義の
冠辭也 俗にまくら詞といふ ○もゝよいでませハ百世息て
在也 伊てませとかけれハ居てませの心は
わがいきての下罷也 ○わがきるまでハ三年
の後帰りて帰るまでと也

和我都麻母畫尓可伎等良無伊豆麻母加
多比由久阿禮波美都ゝ志努波牟

右一首長下郡物部古麻呂

いつまもがハ いハ發語にて くすしつまのすがみ
とらふへきとふりじとのりしと男せしく いの發
語ハ萬葉に隱ゝをいがくゝしとよみたるを證とせ
るを いとゝていせるとしもある事也 爾雅曰
伊ハ維也注云發語詞也 元より物語に發語
おのゝ多き事ハ同じ事多り
後世ハ只ふみにあはせけるとぞいへるてい

なまい從御辭香浩をられし。あれハ和え

○このうたハ、ふさりんしえ、このよしふかり

三のうたあり、これハうたの中にかくしてと思ふ

ほど。（憶良のれいの心）うたにおきて和へらひねもかほ

まもり身の心（思ふ意のれいの心）うたにおきてしらぬかへ

しにまるりむかしを思ひつゞけしれし地て

の謠ハ本末轉倒して用ゐたるなりをかくし

らぬねハ古謠ハ解せざる抄之△此うた上の

ちゝハうたのみなりいふうたに同し

（一万葉ニハ）こゝにうたとりたまふものゝなハ御謠之一つハ此歌

のうたに同し二つある歌の三つハ録のげもえにハ泪りえ

二月六日（右ハ云天平勝宝七年二月之）防人部領使遠江國史生坂本

朝臣人上進歌数十八首但有拙劣歌十一首

不取載之　（これらのうたハ部領使の取捨にまかせたり）

遠江の防人等のうたを部領使が集て

献せしを中にていとつたなきをハ除き持

のこれるをのせられたり　○部領使ハ防人を率て

宰府へ　史生ハ其國守にかはりて其國より難波

の津まてハそれの國の官人部領しれて

難波よりハ兵部省の官人にわたし兵部の官人

部領して太宰府まて送りしと上古の例なるよし

当集は東国の名どころをもて部類をしわかち
此集によりせば何よりも古の国風をうかゞふへく考
おほきてまてあるよへきは此国風の歌のみぞ
以上十四首此集にみえて当国の人の歌なれば
当国の地名あるは歌なく此外に名ある浦
あるは川なとは此国の名所としるべし
此集にのみみえたるは当国には伝はらざれど
さる地の名なれば二首出せり

巻七に 寄浦沙 これは古今歌に出せる

紫之名高浦之愛子地袖耳觸而不寐香将成

むらさきは古来、高貴の衣冠の色にて和漢
ともにもちゆる色なれば名の貴きものとなして
此浦の冠辞とせるも此浦より出るものなるべし
しかるは誤りなり ○愛子とは古言にちかしよ
我はまことなでしみして 実の愛子なるらん
うらを沙などはまさごとはまさごといふなり
借字に用ひしなり

同巻に 寄藻

紫之名高浦乃名告藻之於礒将靡時待吾乎

巻十一

紫之名高乃浦之靡藻之情者妹尓因西鬼乎
なひきもは如くしらすを之の字をそへてよめるに
〇西の字ハ借字也　〇鬼の字をものとよめるハ
ものといふをもけにいへはれのものの事
鬼といふかなてを借るをも借てけり

同巻

木海之名高之浦尓依浪音高鳧不相子故尓
〇上のむらさきのなたかハまくら詞にしき
の海のなあるハ実をのべたれハ名たる浦に

紀伊国にあるよしいへり又紀伊とかきして
木の字をかゝれハ今の人ハ疑はしくおもへれハ
左にいさゝか上古に木神を崇まつりし故
木の国といふ故に萬葉集にも木ノ国とも
木路ともかけるよし古事記をはしめあまたに見えたり
又中古に国郡村里の名をよしき字にあらため
且二字にかきなせし時に紀伊をハ紀の字にあて
きの音を引て唱れハいの字をそへたるよし紀伊と
かきされともきの字ハ紀にもきの字あれハ今も紀
伊とかきてきとよむなるも

巻七

旋頭歌の中に

丸雪降(アラレフル)遠江(トホツエ)吾跡(ニアルアト)川楊(カハヤナギ)雖苅(カリスレド)亦生云(マタオフルテフ)余跡(アト)川楊(カハヤナギ)

あられふるとほとつけしはおしいふおの字を
略してつけつる言をそへたり例は
住の吉をすみのえとよみあらさらのおを
ほしたみしもよめれ同じ例をいふを
略しふは之上古の訓詞のつけいかにまゝ
かうはいづひろけらる例数ふへうしれ○遠江

の二字はとほつあふみとよみて遠州のことなり
一くれよ辻あり川は遠江の浜名郡より
万葉集にこゝ浜のあり川原よりあるのみを
又はしほづすがうかしよみて作れる
次て遠州にはまさて郷とはいへり
よいふはけふら続郡は同し郷のさとなり
郡よりさをくれはとほつえるあるしみ
しろへしあらはうら流傳りまらまれはあれ
略してひろずは言れんを序るにいたる柳は
刈て文りのふくめれもてさらけるあんは

人をおもふ事ある時ハおもひくしてよ又おもひ
おこして恋しきよしよくへし　○
旋頭哥ハ五字七字七字を上句とし下句も
またおなし之万葉集中に数多侍りと
皆えたり古今集に一首あるのみ　うちわたす
をちかた人に物申す我上句　そのそこに白く咲るハ
何の花ぞも下句　これハ歌の人に見られしと
おもぬ詩上句まいるしよしてかすかなき詩の
若うらやとしもしくきを俳諧ありて作れ
の詞詩の詞を下句につけてもしハ下条を

よく作られの詩を　俳諧にうつしの
詩をも此く古学ハすこしたれハ此様によ
まれ侍るのおもはれの詩を作られしらハ
ここに此書あらはしれ、詞てる事よ
何かせ侍るめり此歌の詞は万葉に入るを
おもひてまいらせましあるよしもしるす
寛保二年冬東のミやこにしるす

閑著

遠江歌考を彫まする所由

世にいふ加茂真淵乃大人は敷智郡伊場の里に世々を経て
家居すなる岡部氏黨の中より出たまふ人なりそれか儺
きは濱松乃驛の梅谷なにかしは一代の主としてを家職となしまゝ
ふかくは明暮古事を好みまいらせて其道をまなび
其道を教なむものと思ひこらしておもしたるを世なる
よおそあるはしとなる網よりしむ竈ますあしずまで弟子けるを
家督ぐへきはあさくへ坐せしゝの時のあるのち何くはふなれは

遠江歌考補註　一冊

あるくはそのしいとふくはざりしあるよ身にもえそむ
さる身次にしこしがおかはと雒心おもしそ妻乃刀自に
もまかのめ思ひくるよ江戸乃御里に参でく　田安の殿に
仕奉まするにかりしかど乃委曲しかる事どもを別に我乃
傳ともめ記したるに云へるがごとくなれバ其を聞き見てかれ
子等しさく世にはひめがるよし郷を出てあらかまし出
給へる人のごと聞ひ〓〓〓とものらも有とも〓〓〓其の
夢〓みふら次道乃夢にもいと〓〓しきおよびまとなきのし

しくの江戸にそ旅のやかまひしかどなかの旅居乃假ずまひなり
とやおもし〓む古郷さへあそしくも思をまして学の功もなく
成に〓後年八いのざくくも下にお〓しつ〓り給ふおどけり
三枝乃紋のみけしをそじ〓ん何くれと殊なる清惠どもの重
なりゆく〓〓〓に心形しずあざしさそあむる〓し給へりとしのや
其中のさちるゆ人〓乃あるよ傳へかせる事乃消息文あるかく諮
不乃紀人乃物のさまき形どを〓のくきしおきむるゆめその心だしれ
あどそおもしはうしきぬうし彼消息ども多きざかよおとしき侍よ

旅泊にうつしはべるをさへも志ばくまことに有も終りぬといふに
おのが飛定めるぞと人のいふに其人の迷ひ侍るなりけり綱重しく
古郷にも侍りもなく次て天雲の行へのひくもみえ世をや経ぬまし
又みなしかくいかにそれすまふらん事もしらぬけれどもふるさとへかへりまとの
ましなどもたりひのる家などを書くそへ給ふるもありけるに
かしこはこのぐ豆知乃清慕びれ世にこもり稀なるを心にしもしやと思され
なむ又もわかこのもかきくれぞらりいとや思ひなしたるもの此地なれる
大かの端おくさ飛たる書どめかりしてまた清しく書をへし

たちまちもえいはむかしながらの草稿のまま那るふをみとらりけり
つけりし民部少輔暉昌神主阿波守國満神主齊藤信幸神主など
おもなを始としてらがし友ながらの何がしくれがしとくおのが保く
有しのもとにおのが説を教子なるもし壹岐守土満神主在今乃内山真
龍叟などのもよく取しもたりきんし杉のねとこの贈られたるが中
にもいまだ世のあしはされぬ書どもえられのまとなくなん有ける
くを與遠江歌考ハ其濱松乃里なる渡邉直之が家にもしあるなる
傳へもるるにもなむあるをおのれきなくしの枕のところ此翁乃五十

年乃祭儀竟て後清原重年神主石川依平等とともに志がし
りしらふ有けるほど一日直之来てかくいへらく此書は何ぞうるれ
物ならねど此國人の古乃詞を註したまへるものなれば此地
乃人にしあらんものは世のうも知らせまほしきなりを年ごろ事おこ
なふ我いをしゝみたまふところ至年たえまはほしふ彼類聚の書ども
櫻木に彫らせたまふ甚てびきふもれ暇乃ひまにはそをもやとくと取
出てかんするを見るふにおがふ尽くしかめぬ此年此華まて彼萬葉
考記されしはおぼろくいやし早き世乃考へもしこかちしも無あし

かしぬ物かそもおほけれど名こるも真之がいひけるごとくかく埋らしたのみ
あらせんもねむふあるべからちれ着手べやがてもちろへりそのるさま
ふそあそしなりと更此書もいまだ伴乃きさんがあらふハあしねぞ
そこかしこ書ひがえ好へぶやまくぬあふれど百年乃後うし見
思さんからなみなとしおりたまへるもかて其乃筆のあとの露ぞ
うるらもたおはひハ為乃んいふふおおかさむとて有るこのまゝそしいとも
ねかとうらりもうのせさ物つる彫らせはるのハい為そ世人れ知せるやう
定物のおたまれおさんへくいみしくおそ物憐あこのたの難波津

あさての山のかよふぢ人のあまさきれよろこびもやとの心なれども
うたをよミなす方にありし聊りけるまゝて此にまへある都のが
老よ此書の端なども隨(ツク)へいとんハ大の浦屋おほけなきしを
げなしハ有なきど人もまれも師よりことゝよくよあるべきなり産(ウブ)
し國の故事(フルコト)なれど年月よ思ひよりしる事(コト)どめのいはな
おしゆめのまつるをふまふる事(コト)のついでよハえもいはずあるべし
さるむ引佐細江のみをつくしさるよはなしげなるよ
し聊しゞもこうんふつなしるがゆかりえ寸戸(キヘ)我竹(ガタカ)

垣(カキ)ゝのもとにふかきなもとゝまぐとふ見んとなる耶毛

文政三年正月

夏目甕麿